

社会教育委員ニューズレター 第12号

発行 佐賀県社会教育委員連絡協議会
事務局 佐賀県民環境部まなび課内

九社連運営委員会・理事会

11月、書面により開催されました。

運営委員会の議案として令和元年度合同佐賀大会の収支決算報告、令和2年度沖縄大会の収支予算案及び同大会の運営並びに令和3年度長崎大会の開催について協議され、原案どおり承認されました。

理事会の議案として令和3年度の役員案が提案され、会長に次期開催県である長崎県の池田会長が選出されました。

県社教委連第3回役員会

11月18日、3回目の役員会を県庁で開催しました。

協議事項として、三苦紀美子副会長が県社会教育委員を辞任されたため、新しく県社会教育委員の

中から山口ひろみさんが理事に推薦されました。そして、協議により山口委員が副会長に選出され、臨時総会において承認されました。また、令和2年度佐賀県社会教育委員実践研修会（案）についても協議が行われました。

報告事項として、全国大会の令和2年度の新潟大会及び令和3年度の石川大会、九州大会の令和2年度の沖縄大会及び令和3年度の長崎大会、全社連表彰の被表彰者の決定について報告がありました。

県社教委連実践研修会

1月19日、令和2年度の実践研修会をアバンセホールにおいて開催しました。

上野会長のあいさつの後、全国社会教育委員連合表彰及び県社会教育委員連絡協議会表彰の表彰式を行い、最後に「学校教育と社会

教育の連携について」をテーマにミニパネルディスカッションを行いました。

コーディネーターに上野景三会長、パネリストに小林由枝県教育委員、田原優子多久市教育長、堤和義佐賀市教育委員をお迎えして、約110分にわたってディスカッションを行っていただきました。その概要は、次のとおりです。また、当日の内容については、佐賀新聞にも掲載されました。

上野会長あいさつ

上野会長から研修会の冒頭に次のとおりあいさつがありました。

社会教育委員の使命は、社会教



育計画の策定であるが、作成している市町はほんのわずかであるので、教育振興計画や教育大綱に委員の意見を反映してほしい。そのためにも、教育委員との意見交換をお願いしたい。

コロナのためいろいろな行事等が中止となり、社会教育施設が休館に追い込まれた。学校でも給食で命をつないでいる子がいると聞く。休館で立ち止まらずに社会教育施設で何ができるのかをもっと考えていく必要がある。

今回の実践研修会は、学校教育と社会教育の連携について取り上げている。このコロナを契機に私たちは連携の新しいステージに向けて取り組んでいかなければならないのではないだろうか。

表彰式

今回は全社連表彰と県社教委連表彰の表彰式を行いました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全国社会教育研究大会新潟大会や県社教委連総会の実地開催が中止となったため、実践研修会場で実施しました。

被表彰者は、全国表彰が伊万里



市の田内法子さん、県表彰が伊万里市の前田正義さん、有田町の中野哲也さん、白石町の諸岡利公さん、鳥栖市の檜崎タキコさんです。誠にありがとうございます。



（上野） いつの時代にも学校教育と社会教育の連携が叫ばれてきた。今、この連携が新しいステージに

では、次のとおりです。

多久市の田原教育長からは、コロナによる学校の休校に関する事、虐待や自殺に関する事、総合型地域スポーツクラブに関する事などについて紹介されました。堤和義さんからは、佐賀市の赤松コミュニティ・スクールの活動について紹介されました。

それぞれが発言の要旨については、次のとおりです。

ミニパネルディスカッション

進みだしてきたのではないだろうか。理由の一つ目は、国が本格的にコミュニティ・スクールや地域



学校協働活動の推進を謳っていること。二つ目は、コロナをきっかけとして子どもたちの生活の安全安心という問題がクローズアップされてきたこと。三つめは、GIGAスクール構想で子どもたちにタブレットが配布されることである。この配布により子どもたちの学校生活は大きく変化するのではないか。

大学もリモート授業で、学生は大学に來ないで済むようになった。なぜ大学に行くのか学生は考えるようになる。おそらくそれは高校や義務教育段階にも及んでくるのではないか。そのときに学校はどうなるのか。一方で、学校を支える地域は何ができるのか。そのことを改めて考えていく必要がある。



（小林） 武雄市で子どもたちと過ごす居場所づくりに取り組んでいる。学校からも家庭からも地域から

も同じ目線で子どもたちを育てていきたい。家庭や地域の教育力の低下とともに学校の役割が肥大化して、生きづらい社会になっている。そのことに抵抗したい私が

いて、この「よりみちステーション」の活動を行っている。

「ぼちぼちや」は、放課後児童クラブに行っていない子どもたちが放課後に自由に遊べる場所として始めた、宿題のできる駄菓子屋さんの雰囲気のある場所である。週一で、ゴロンと寝そべったり、異年齢で遊んだり、駄菓子を買ったりしている。

「てくてく」は、中学校に乳幼児の親子や地域の人が訪れて、生徒と触れ合う場所である。中学校でコミュニケーション・スクールに取り組みされており、受け入れられたと考える。

「くむくむ」は、単立っていった子どもたちがいつでも戻ってこられるように作った親戚の家のように過ごせる場所。居場所を求め大人が集う会も開いている。

活動費は、会員の会費や、活動を支えていただいている寄付、よりみちブランドのコーヒーマグの販売、民間の助成金等で運営している。

それぞれの居場所は、子どもたちが来たいときに自分で来られるように生活圏内にあり、どんな家庭の子にも来てもらえるように参

加費無料、親の承諾は不要としている。今は異年齢の子と遊ぶことが少ないので、いろいろな年代の子が混ざりあって過ごせるようにしている。

大人が提供するプログラムはない。大人が提供しない場所をあえて作った。子どもたちは自発的に遊びを作り出して過ごしている。何もない時間、無駄だと思ふ時間こそ子どもが育つ瞬間があると信じている。

私たちは、場を提供しているだけ。親も活動に参加され、親の学びの場、次の担い手づくりの場にもなっている。

信頼できる大人になるために、日常の場でもにありたいと心がけている。そうすることで、不登校や発達障害、貧困等の相談が持ち込まれるようになった。できることには限りがあるが、一緒に考えていこうという対応をしている。

いつでも誰でもアクセスがしやすい小さな居場所が地域の中にたくさん点在しているといいと思うし、居場所となる人、温かいまなざしで見られる大人がたくさんいると、子どもたちはのびのび生活し

ていくことができる。



(田原) 多久市内の3校ともコミュニティ・スクールで義務教育学校である。昨年2月の突

然の休校措置。高校入試前の大事な時期、学習のまとめの時期だった。まず決めたのは、働くお母さんがお困りだろうから、希望される家庭の子どもたちを学校に受け入れること、雇用を守ることである。実際の受け入れ人数は予想より少なかった。メディアはオンライン学習の光景と称し残酷な教育格差を映し出した。インターネット環境のない家庭の子どもたちもある教室にさせ、そこでオンラインを受けさせていた。多久市はポケットwifiを準備し、教育格差を作らないと決心している。また、学校不要論が浮上しないように魅力的な学校にしたい。

学校給食で生きている子や、学校が身を守るところになっっている子がどうなるのか気がかりだった。令和元年の全国の児童相談所で扱った虐待件数は194千件、自殺も10代だけ増えている。コロナ禍で

中高生の自殺が増えている。今私たちがすべきことがあるのではないだろうか。

成人式を実行委員会方式にして4年になる。自主的に企画運営ができていく。成人式開催への感謝の気持ちや、同窓会の自粛を自ら決め、伝えていたことが嬉しかった。そして、その実行委員会から多久社会教育委員が生まれた。

総合型地域スポーツクラブに部活動全体を移行したい。現在、委員会を経て、合同練習を行っている。少子化で1校ではチームができない、限られたスポーツとの出会いは少なく、専門指導員が少なくということもある。地域ぐるみで子どもたちを育みたい。



(堤) 地域の理解や支援などがあつてはじめて学校教育は成り立っている。人間は環境で育つ

といわれる。まさに地域の環境により子どもたちは成長するし、大人もその環境の中で子どもたちにしつかりした背中を見せていけるだろう。

佐賀市の赤松小学校は、以前は

クレームの多い学校だったが、それを「建設的・有意義なものに変容させたい。そのために地域の方と一緒に学校経営をやっていく必要がある。」という校長先生の思いから学校運営協議会が導入された。この協議会を設置する学校をコミュニティ・スクールという。

会議で校長先生が示した経営方針を議題にあげ、これを承認したら協議会委員が方針達成のために様々な活動に参画し、地域の方々とともに学校支援に取り組んでいる。委員には地域で活動されている代表の方もおられ、学校の情報をおろしている。このことにより、地域の方が学校のことを理解されるようになって、クレームが建設的な意見に変わってきたのではないだろうか。

9つのコミュニティの多くは新しく作った組織ではなく、従来行っていた「点」の活動が「線」で結ばれ、より効率的に有効な活動として取り組まれている。コミュニティ・スクールは、学校と地域がそれぞれで相互恩恵を受けることができる仕組みだと思う。

赤松小創立100周年行事のときの浄財の残金を基に赤松コミュニティファンドを創設し、PTAの理解と協力を受け、コミュニティ・スクールの活動資金に充てている。

(会場から)「てくてく」設置のいきさつを詳しく聞きたい。

(小林) 学校が荒れていた当時、教師だけではなく、地域の大人が肯定的な関わりで生徒に働きかけることができないかと思つて始めた。生徒が毎週来て赤ちゃんと触れ合つて、お母さんたちから感謝され、温かいまなざしをもらった。地域の大人の優しい接し方とか、彼ら自身が役に立つ経験ができたことは、少しなりとも効果があったのではないか。今は落ち着いた状態になっている。ただ、今は、気持ちを表に出せない生徒や不登校が増えているのではないかと心配である。

(会場から) 昔、駄菓子屋での子どもたちの目は生き生きしていた。どういった効果があるか考えるか。

(小林) 今の子どもたちも生き生きとしてやってくる。学校の規則で子どもだけでの買物禁止されているので、実体験が少ない子が多

いと感じる。わずかな小遣いでも自分が欲しいものを親にあれこれ言われずに買える喜びはどの子にもある。楽しい、ほのぼのとする、生き生きとする時間が見て取れる。

(上野) コロナ禍の中で子どもたちにもどのような変化が見られたのか。また、今後留意すべきことや気がつきがあれば紹介してほしい。

(小林) 休校期間中も居場所を開けた。子どもだけで家にいるのが心配な子どもがいたので、開けなければいけないと思つた。その子らとお昼ご飯を一緒に食べ、ともに過ごした。また、給食がなかったの、子どもだけでも簡単に調理して食べるのでできるカップ麺やお餅を配つたりもした。

大人が不安に思っていることを、子どもたちも子どもたちなりに不安に思っている。どう安心な言葉を伝えていこうかと思つたが、普段から家庭の状況とかが分かっていたので、対応がしやすかつたと思う。

開けていることに対する世間の目は感じていた。基本的な感染症対策を行い、子どもたちの遊びが密にならないように一緒に考えた

りした。子どもたちが、窮屈な中でも散歩や外遊びができる環境をぜひ大人にも見守ってほしいという発信は続けた。

(田原) 休校期間中の学校受入がどのくらいになるものか、大まかな把握しかできない中でのスタートだった。登校者の様子が気になり見に行くと先生をひとり占めできて嬉しそうにしていた。

多久市の少年の主張では、全国一斉休校という体験をして、「学校に行きたくてしょうがなかった。」と主張してくれた。友だちといざこざがあったり、ふざけ合つたりしていたけど、そんなことも勉強だったんだと分かつた。

登校日には、普段宿題をやつてこなかったり朝遅く来る子が、宿題を持参したり朝一番に来たり、学校を楽しみにしていた。

(堤) コロナ禍による行事の中止が相次いでいるが、来年度も中止になると、今後行事がなくなつてしまう心配がある。どうにかしてできないかと考えるのが我々の課題だと考える。佐賀市で行っている「市民総参加子ども育成運動(子どもへのまなざし運動)」があるが、

これを基に地域・家庭・企業・学校の4者が同じ方向に向かってやっつけていけば、このコロナ禍をなんとか打破できるのではないだろうかと思う。

（上野） これからウィズコロナ、アフターコロナの時代に突入する。子どもたちはリモートに慣れており、リモートワークが当たり前になる。そのような時代に社会教育委員として何ができるのか、何をしていたらよいのか、メッセージをいただきたい。

（小林） 子どもとはリアルに会ったが、大人とはリモートで会合を行った。リモートの方が話しやすいという声がたくさんあった。リモートだと若い人や社会に出にくい人と出会いやすくなるのではと思った。大人数で集まるのは難しいが、少人数であれば集まりやすい。小さくても一人一人に届くような形で行えば参加しやすいし、感染リスクも少なくて済む。このコロナ禍でひとり親家庭とか貧困とかの格差がはつきり見えてきた。地域の行事等もこのような方に配慮しながら行えば、地域の温かいまなざしが届くのではないだろう

か。

（田原） 子どもたちにとって体験はとても大切なことで、失敗もいっぱい体験してほしい。また、何かあったらこの人には話せるのかな、困ったらここに来ればいいなと思ってもらえるような雰囲気のままざしで伝えていきたい。

（堤） 原点回帰をコロナで教えてもらった。中学生が修学旅行で地元の下さを見つけている。足元の地域のよさを見つめ直す取組が必要ではないだろうか。

（上野） 学校教育と社会教育の連携が新しいステージに入りかけているのではないかと冒頭に話をした。新しいステージというのは、アフターコロナの時代。この新しい時代を社会教育委員としてどうやって切り拓いていくのか、多くのヒントがあったのではないか。小林さんからはリモートの可能性について、田原さんからは直接体験の機会の提供について、堤さんからはいろいろな行事の蓄積について話があった。蓄積がなければ、行事はすぐ中止しようということになる。子どもたちになんでも体験させればよいということ

ではなく、どういう体験をどのくらいさせるのが求められているのではないか。反対に、何もしないという体験もあっていい。そういった幅の広さの中で、私たちは社会教育活動を考えていく必要があるのではないか。新しい連携の在り方というのは、そういうところにヒントがあるのかもしれない。

（文責 事務局）

【シリーズ】わたしの社会教育委員活動（2）

「地域とともに・・・」

鹿島市 社会教育委員

松本 真

令和2年は、コロナ禍のため社会教育関連の各種大会が開催されず、紙上発表になってしまいました。各地区それぞれに工夫した活動をされていることに敬意を表します。

私は、令和2年6月に鹿島市の社会教育委員に任命されました。これまでは学校教育に38年間関わってきましたが、生涯教育の必

要性が叫ばれても、なかなか具体的な活動や取組を始めることができませんでした。そこで、現在行っているささやかな実践を紹介します。

私が今取り組んでいる活動は、小中学生の安全な登校と児童生徒への声かけです。朝の時間、30分程度ですが交差点に立ち、安全指導をしています。そのとき一番気をつけていることは、児童生徒へのあいさつと声かけです。毎日見ていると、一人一人の表情や声から、家庭での様子や体調が少なからず分かります。最初は返事なかった児童も、だんだん慣れてくると返事が返ってきます。また、ほとんど聞き取れなかった低学年児童の挨拶もはつきり聞こえるようになってきました。ただ、このコロナ禍で一番困るのは、児童生徒の表情が見えにくいことです。目だけではなかなか表情が分かりにくく、先生は我々以上に困っておられることだと思います。

私は現在、鹿島市にある一般財団法人田澤記念館に勤務しています。皆様は一昨年の明治維新150周年で、鹿島出身の田澤義鋪の名前

を耳にされたのではないでしょう。田澤義鋪は、大正時代から昭和19年まで活躍した社会教育家で、「青年団の父」と言われている人です。一般には「青年団の父」が有名ですが、その他、選挙公正運動や労使協調運動を進めた人です。また、今年100年になる明治神宮造営にも大きく関わった人物です。ここ田澤記念館は、田澤義鋪の考えを継承し、様々な活動を支援しています。年齢は、小学生から高齢者にいたるまで幅広く、生涯学習の一翼を担っていると云っても過言ではありません。

田澤は100年前、「友愛」と「創造」を合言葉に青年団活動を進めました。だれにでも分け隔てなく接し平和を願う「友愛」と、自分で考え行動を起こす「創造」は現代でも立派に通用するスローガンです。

現在、少しずつではありますが、田澤の考えや業績を伝え理解してもらうため、小学校で出前授業を行っています。今年度14学校で授業を行いました。田澤は、一人一研究を青年に進めて成果をあげました。そこから「一事貫行」とい



【小学校での出前授業】

う言葉が生まれてきました。どんな小さなことでもよいので毎日続けていこうという意味で、小学生には分かりやすいと思います。その他、「平凡道を非凡に歩め」という言葉も残っています。

出前授業を続けていくと、中高生になって田澤の考えや業績を分かってくれるものと信じています。時間はかかりますが、少しずつ分かってもらえればよいと思っております。今後は、地域住民や高齢者教室へも出向き、伝えていきたいと考えています。浸透するまでに時間がかかりますが、教育に時間はつきものです。

よい例が、多久市の「論語」教育の実践です。もう20数年前から実践されているようで着々と成果が出ています。時間をかけ、学校と家庭、地域が協力して進められていることに意義があると思います。家庭と地域の教育力を育てることが社会教育力を伸ばす一番大事なキーワードだと思います。

「コロナがもたらしたもの」

玄海町 社会教育委員

平山 潮 恩

令和3年、年始明けの週末、1月8日に1都3県、さらに翌週の1月14日には2府5県に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発令された。

思い起こせば昨年の3月、町内の社会教育関連の行事や会合がすべて中止になった。

さらに、開催半年ほど前から講師依頼や資料作成、参加者募集などが行われてきた小学生対象の体験学習2講座が開催目前にして中止となった。

令和2年度は町内でトマト栽培・販売をしている専業農家と地元製の製造業者のコラボレーションでトマトパスタ作りを計画していたがやむなく中止にした。また、高齢者向けの生涯学習講座も5月から開催を予定していたが、7月の末にようやく開催できた。

しかし三密回避のため、恒例になつていた「県外研修」「舞台発表」「グループワーク」「学校との異世代間交流」「レクリエーション」などは実施不可能となり、代案を立案するのに多くの時間を要した。もちろん会場は収容人員の多い会場に変更し、運営事務局スタッフも検温、消毒対応のため、以前の3倍に増員しなければならなかった。

さて、前述した小学生対象の体験学習講座はそれまでの企画を白紙撤回し、三密回避の企画を立案することになった。コロナ禍以前は地元のパン屋、フレンチレストランなどの職人さんに指導をお願いしていたが、子ども料理講座を開催していたが、コロナ禍では調理、飲食は最も自粛しなければならない。

また調理室のテーブルは9つ、距離を保つためには1テーブル1名合計9名の参加者しか受け入れられない。

そして知恵をしぼった末に出てきた企画が、子ども坐禅体験であった。企画主旨は「しゃべらない」「動かない」「近づかない」。まさにコロナ時代にうってつけの内容だ。



【マスクを着用「子ども坐禅体験」】

コロナ禍では、行事開催時に感染予防対策を徹底してはいるものの、開催すること自体が感染機会を一つ増やすことになることは否定できない。参加希望者が増えれば増えたで、以前のように手放し

で喜べない。コロナ禍では安直に定員を増やすわけにはいかないのだ。

令和2年度に開催した「アジ釣り体験」では申込が殺到した。しかし三密と釣り竿の共用を避けるため定員は10名。多くの子どもたちが残念ながら参加できなかった。来年度は開催回数を増やして対応する予定である。

コロナはいつ終息するのか？

1月15日現在、佐賀県内の新型コロナウイルス感染者数は増加傾向にあり、衰える兆しを見せない。それどころか、クラスターの発生も報告されている。県内ではすでに地域のケーブルテレビや動画配信サイトを活用したりリモートでの社会教育関連講座の開催に取り組んでいる自治体もある。それらは情報の到達率には多くの課題があるかもしれない。しかし、コロナ禍の中でも社会教育に真摯に取り組んでいこうという熱意が伝わってくるようで感銘を受ける。

いま地域の住民や自治体は、社会教育に対する姿勢や乗り越えようとする力をコロナから赤裸々に

試されているのかもしれない。そう感じているのは私だけだろうか？

「大好きな社会教育」

佐賀県 社会教育委員

山口 ひろみ

私は、社会教育が大好きです。

16年前「社会教育についてみんなで学んでいるよ」と声をかけて頂いた事がきっかけでした。そのとき初めて「社会教育」の言葉を聞きました。その場合は、社会教育に関わっている方や活動されている方のお話をたくさん聞くことができ、社会教育とは何かを探索しなくなりました。毎月の学びの時間が待ち遠しく、ワクワクしていたことを今でも覚えています。たくさんの方々、子どもたちを真ん中において、どのような地域社会を作っていけるかと一生懸命考え、議論し、熱い思いを語っておられ、たくさん学びと勇気を頂きました。

「佐賀県社会教育は、がんばっていて、ステキだなあ」と感じました。

まずは、自分の住んでいる地域で、できることから始めようと思いい、PTA活動や子どもクラブ活動に参加しました。参加するまでは、学校や地域の事を知らうと思いうこともなく、理解もできていなかったと思います。参加することで、学校の先生方ともお話をする機会や地域の方と関わる事も増え、学校や地域の現状を知るきっかけとなりました。

知ることがなければ、積極的に地域参画することもなかったのではないかと思います。また、知ること学校・地域の応援者の一人にもなりたいと思いました。

5年前から、地域まちづくりに関わらせて頂き、中学校区の我がまち体操を作りました。これも地域を見て、感じたことがきっかけでした。「ラジオ体操は、毎日、子どもたちから高齢者の方まで集まり、体操をしているなあ。地域で行事をしてもなかなか集まりにくいことが多いのに、ラジオ体操だとみんなが集まり、一緒に同じ時間を過ごすって、こんなに素晴らしいことはないなあ。すごいことだ」と思いました。「そうだ！！

わが町のオリジナル体操を作った
ら、笑顔いっぱい元気な地域が
増えるのではないか」と思い、地
域まちづくりに関わらせて頂くよ
うになりました。



【イベント時の様子(子ども
たち一緒に体操)】

歌詞のフレーズを地域のみな
さんに公募で集めると、子どもか
ら大人までたくさん応募があり、
校区の魅力いっぱいの歌詞ができ
ました。その歌詞に曲や振り付け
をつけて頂き、完成したものが「五
校ににご元気体操」です。この
校区は、小学校が4つと中学校が
1つあります。校区地域まちづく
り会議の中で、それぞれの地域で
の行事等に参加し、体操の周知活
動を始めました。今まで知らな
かった小さな単位で行われている夏

まつりなどの地域活動に参加する
ことや地域の方と顔を合わせるこ
とで、地域を知るきっかけとなり
ました。初めは、なかなかリズム
についていけない方もいらつしや
いましたが、子どもたちから覚え
てくれて、大人の方も歌詞を歌っ
てくれるようになってきました。
公民館にも協力して頂き、防災無
線を使って朝夕の1日2回、毎日、
放送して頂いています。少しずつ
ですが、みなさんが知って頂ける
ようになってきました。高齢者の
方から、椅子に座ってもできる体
操がしたいとお声から椅子バー
ジョンもできました。現在では、
高齢者施設等でも毎週欠かさずに
地域の方と一緒に体操をされてい
ます。

また、イベントの実施や、体操
から地域のウォーキングまで発展
し、活動しています。中学校では、
吹奏楽部のみなさんが「五校にこ
にご元気体操」を演奏して地域で
披露してくれたり、体育祭の準備
体操に取り入れて、夏休みから中
学生が熱心に練習もしてくれまし
た。体操をしている姿を見ると、
子どもも高齢者の方もとても楽し

そうにされていて、これが一番大
切だと思いました。

『楽しい』これが社会教育にと
って欠かせないことだと思えます。
行う側も参加する側、どちらも楽
しいと思える瞬間や場所があるつ
て大切な事ですね。

また、知る、理解することで何
ができるかを考えるきっかけとな
り、一歩を踏み出すことでつな
りができることも気づかされまし
た。

これからも活動を通して、子ど
もたちを真ん中において、地域の
笑顔が増える取組、そして楽しい
と思える社会教育を目指してい
きたいと思えます。

編集後記

1月に開催された実践研修会
はいかがでしたでしょうか。年末
年始をコロナ禍で自宅で過ごされ
いつもと違ったお正月を迎えられ
たことでしょうか。そのような中、
ミニパネルディスカッションでは、
パネリストの方々から本音に近い
お話もお伺いすることができ、気
分がスカッとしませんでしたか。

また、ウイズコロナ、アフターコ
ロナのご時世(「ご時世」という言
葉、久しぶりに耳にしたような)
における社会教育のヒントもたく
さん聞くことができたのではない
でしょうか。

そこで、前回から社会教育委員
のみなさまに「わたしの社会教育
委員活動」ということで、委員御
自身の活動内容や日頃の想いなど
について御執筆いただいています。
今回のお話を聞いて取り組まれた
ことなど、なんでも結構ですので、
我こそはという方はぜひ事務局ま
で御一報ください。

なお、体裁は800字以上1,700字以
内としています。多少オーバー
しても短くても問題ありません。
様式は自由(手書き・ワード等)で
す。お待ちしております。

佐賀県社会教育委員連絡協議会事
務局(佐賀県民環境部まなび課)
〒840 8570 (住所不要)
TEL 0952 (25) 7313
Fax 0952 (25) 7406
✉ manabi@pref.saga.lg.jp
